

偶然の再会を演出する消極的な人向け人間関係継続支援システム

芥川 洋平 山本 景子 倉本 到 辻野 嘉宏*

概要. 周囲の人と積極的に交流することが苦手な人付き合いに消極的な人は、日常生活において席を共にした初対面の人に連絡先を聞くことが難しく、そのときに新たに構築した人間関係を維持できない。この場合、その人との偶然の再会が人間関係を再開・継続するきっかけになることもありうるが、そのようなことはめったにないという問題がある。また、消極的な人はたとえ偶然の再会をすることがあっても、相手についての記憶の曖昧さ・人違いの危惧などから声をかけられず、結局その機会を有効に使えないという問題もある。そこで本研究では、以前に席を共にしたものの、そのときに連絡先を聞くことができず、それ以降にも連絡をとることができない人との関係を再開・継続させることを目的とする。これを実現するために、偶然の再会を消極的な人のために演出する手法として、以前に席を共にした消極的な人同士が同じ場所に向かうよう促す情報を提供し、近くに居合わせたときに相手の存在に気づける通知を行うシステムを提案する。

1 はじめに

私たちは日常生活において、同じ目的を持った人同士が同じ場所に居合わせたり、友人の友人などの繋がりから交友関係が広がったりすることによって、初対面の人と席を共にすることがある。例として懇親会や合コンなどが挙げられる。その際に、初対面の人と一緒に会話したりお酒を飲み交わしたりすることで、新たな人間関係を構築することができる。

この新たに構築した人間関係を維持する手段として、その人の連絡先を聞き連絡をとりあうことが挙げられる。しかし、周囲の人と積極的に交流することが苦手な人付き合いに消極的な人（以降、「消極的な人」）は、初対面の相手に対して連絡先を聞くことができない。また、消極的な人は、連絡先を知っている共通の知人や幹事を經由することで、後日に連絡先を聞くこともできない。とりわけこのような状況は、連絡先を聞きたい相手が異性の場合に多く起こりうる。このように、消極的な人が初対面の人との連絡先を聞くことができないという問題（以降、「問題点1」）が起こる理由として、

- 関係の浅い相手に対して自分の連絡先を教えることに抵抗を感じ、同様に相手の連絡先を聞くことに抵抗を感じる
- 場の盛り上がりなどを考慮して、初対面の人との連絡先を聞くタイミングを逃してしまう
- 後日に連絡先を聞こうとしても、共通の知人や幹事に誰の連絡先を知りたいかという自身の興味を教えることに恥ずかしさを感じる

ということが考えられる。

そこで本研究では、消極的な人が、以前に席を共にしたものの、そのときに連絡先を聞くことができず、それ以降にも連絡をとることができない人との関係を再開・継続することを目的とする。

一方、街を歩いているときに、以前に席を共にした初対面の人を偶然見かけることがある。このとき、その人に声をかけて再会することで、刹那的になっていた人間関係を再開・継続するきっかけを作ることができる。しかし、街を歩いているときに以前に席を共にした初対面の人を偶然見かけることは頻繁に起こる事象ではない。

また、以前に席を共にしたものの、連絡を取らなかった人を偶然見かけるまでの間にその人の顔や容姿を忘れてしまっていたり、曖昧になっていたりすることがある。その結果、消極的な人は両者がすぐ近くに居るにも関わらず、その人に声をかけずにそのまますれ違ってしまい、人間関係を再開・継続する機会を逃してしまうことになる。このように、消極的な人が偶然の再会を逃してしまうという問題（以降、「問題点2」）が起こる理由として、

- 相手についての記憶の曖昧さから確信が持てず、別人だった場合を危惧する
- 自分が相手を覚えていても相手が自分を覚えていないかもしれないと懸念する

ということが考えられる。

以上より本研究では、消極的な人が相手の連絡先を聞けなくても、人間関係を再開・継続するきっかけになる偶然の再会を、消極的な人のために演出する。その手法として、以前に席を共にした消極的な人同士が同じ場所に向かうよう促す情報を提供し、近くに居合わせたときに相手の存在に気づける通知を行うシステムを提案する。

西田ら [1] や閑野ら [2] も初対面の人あるいは関係の浅い人との交流促進支援システムを提案してい

Copyright is held by the author(s).

* Youhei Akutagawa, Keiko Yamamoto, Itaru Kuramoto and Yoshihiro Tsujino, 京都工芸繊維大学



図 1. 提案システムの通知画面表示例

るが、西田らは、交流の場から離れた後も人間関係を継続させることについて、閑野らは、周囲の人と積極的に交流することが苦手な消極的な人がシステムを使うことについては考慮していない。

2 提案システム

以前に席を共にした消極的な人同士に、人間関係を継続するきっかけになる偶然の再会を提供するために、図 1.a) のように彼らに同じ店舗や施設の情報を表示し、同じ場所に行きやすくする。これにより、ユーザは人間関係を継続するきっかけになる偶然の再会をより多くすることができると考えられる。また、このように同じ場所に行くかもしれないという可能性の情報を通知することで、もしかしたら相手に会えるかもしれないという緊張感を持たせることができると考えられる。これにより、ユーザを吊り橋理論 [3] のような状態にすることができ、特に異性の場合において、より深い交友関係に繋げることができると考えられる。

これを問題点 1 を解消しつつ実現するために、ユーザが直接相手の連絡先を聞かなくても、システムが以前に席を共にしていた人を識別し、ユーザに偶然の再会の機会を与えるようにする。まず、以前に席を共にしていた人を識別する手法として、席を共にしていたユーザの携帯端末に共通の ID（以降、「イベント ID」）を持たせ、この ID を用いて席を共にしていたユーザかどうかを判別する。そして、イベントの開始時に、いつ・どこのイベントに参加したかという情報とイベント ID を各ユーザの携帯端末で共有させる。

また、問題点 2 を解消するために、以前に席を共にしていた人同士がその後再び近くに居合わせたときに、システムが図 1.b) のような画面表示と音や振動による通知を行うようにする。このように、いつ・どこのイベントで出会った人がいるかの通知を行うことによって、ユーザが周囲を見回して同じイベントに参加していた人を探さきっかけを与えたり、ユーザが容姿を忘れてしまったり曖昧になったりし

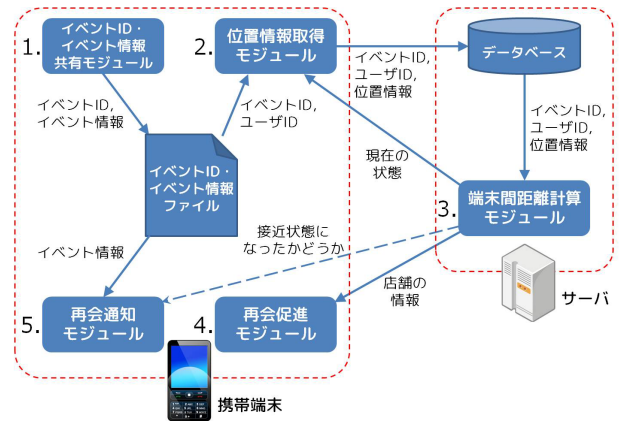


図 2. モジュール間の関係

ていた相手について確信を持ったりすることができると考えられる。さらに、システムの通知に気づいて同じように携帯端末を持って周囲を見回している人がいることに気づき、その人に注目することで、相手を特定しやすくなると考えられる。各ユーザの距離を測定する手法として、各ユーザが所有している携帯端末の位置情報を取得し、取得した位置情報をサーバに送信し携帯端末間の距離を算出する。

提案システムは携帯端末上およびサーバ上に実装された以下の 5 つのモジュールで構成される。

1. イベント ID・イベント情報共有モジュール
2. 位置情報取得モジュール
3. 端末間距離計算モジュール
4. 再会促進モジュール
5. 再会通知モジュール

また、モジュール間の関係は図 2 のようになる。

3 今後の課題

再会したときの交流のさらなる支援のために、提案システムが近くに以前席を共にした人が居ることを通知するだけでなく、再会したときに話す内容に対する支援をすることが挙げられる。

参考文献

- [1] 西田 健志, 濱崎 雅弘, 栗原 一貴. 超消極的な人でも安心して使える学会での交流促進システム. WISS2012, pp.103-108, 2012.
- [2] 閑野 伊織, 田中 二郎. イベント開催前から開催後まで一連の流れに沿ってコミュニケーションを支援するシステム. マルチメディア, 分散, 協調とモバイル (DICOMO2013) シンポジウム, pp.56-63, 2013.
- [3] D.Dutton and A.Aron. Some Evidence for Heightened Sexual Attraction under Conditions of High Anxiety. Journal of Personality and Social Psychology, Vol.30, No.4, pp.510-517, 1974.